

[特別活動]

学級目標を生かした問題解決集団の育成 - 振り返りのレーダーチャート化とクラス会議をとおして -

本宮佑二郎*

1 問題の所在

令和2年度から完全実施される小学校学習指導要領(平成29年告示)の解説特別活動編では、特別活動で育成を目指す資質・能力が明確にされた。資質・能力の中の「学びに向かう力、人間性」では、以下のような具体的な姿が挙げられている。

「多様な他者の価値観や個性を受け入れ、助け合ったり協力し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度」
「集団や社会の形成者として、多様な他者と協働して、集団や生活上の諸問題を解決し、よりよい生活をつくろうとする態度」

このような資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくことになる。また、特別活動を指導する上での重要な3つの視点として「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が挙げられている。資質・能力の明確化と指導の視点を踏まえ、平成29年告示の学習指導要領では、学級における問題解決の話合いの学習過程が例示され、学習活動の流れが分かりやすく実践しやすいものとなった。しかし、多岐に渡る学級担任業務の中これらのことを意識し続けることは大変困難なことである。そこで、多くの学級で実践されている「学級目標作り」を軸とすることで児童、教師、保護者が学級の目指すべき姿を共通理解できるのではないかと考えた。赤坂(2018)は、「学級目標は、問題解決集団の育成というゴールにたどり着くための、子どもたちと共有する道標」と述べており、学級目標が教師と児童の間で共有されていることで問題解決集団の育成の手立てになることが述べられている。その一方で、学級目標に関しては、その必要性を多くの教職員が実感しながらも実践の方法は、様々で形骸化を指摘する声もある。学級目標のない学級について、杉田(2009)は、「目標のない学級や子どもは糸の切れた凧のようなもの」とし、「よりよい生活づくりの第一歩としての目標づくり」が必要不可欠であると述べている。しかし、学校現場の現状として「学級目標が作られていなかったり単なるお題目になっていた、肝心の個人目標が設定されていなかったりする学級が意外に多い。」と学級目標を不要とする実態や形骸化について問題視している。筆者自身も年度初めに学級目標を作ったが具体的な各種の教育活動との関連性がないままとなり、まさに形骸化した学級目標になってしまった経験がある。

そこで本稿では、学級目標を生かした問題解決集団を育成するために田中(2013)が提唱する「学級力向上プロジェクト」と赤坂(2014)の著書における「クラス会議」を参考に両取組を組み合わせ実践した。学級目標の「レーダーチャート化」における、問題解決の視点を与え問題解決のサイクルを生むという利点と「クラス会議」における問題解決能力を高めるといった利点を活用することで、より児童の問題解決に向かう意欲と能力、またその過程での人間関係の変容について考察する。

2 研究の目的

本研究では、学級目標をレーダーチャートで数値化した振り返りとクラス会議による問題解決場面のサイクルを生んだ学級集団の変容を考察する。その上で学級目標の有効な活用法の一例と問題解決集団への第一歩となる、学級問題へ目を向ける集団作りの可能性を提案する。

3 研究の内容と分析の方法

(1) 学級集団の実態

対象の小学校は、全校児童171名、全学年単学級の小規模校である。本学級は、26名(男子14名、女子12名)である。

*佐渡市立畑野小学校

実践期間は、平成30年4月から令和元年7月までで、平成30年度は、第5学年、平成31年度は、第6学年となり、筆者が2年間継続して担任している学級である。第5学年の4月には、男子は、素直で明るい反面、生活態度や授業規律が守れない児童が複数いた。女子は、物静かで授業に集中するが、男子と仲良く遊ぶ姿はほとんど見られず、授業での男子の行動を注意することにも諦めているという言動が多くあった。

第5学年時の7月に行ったQ-Uアンケートの学級満足度の結果では、学級生活満足群は、5人で学級の19%（全国平均は39%）、学級生活不満足群が15人で学級の58%（全国平均は25%）を占めており、全国平均と比較しても学級満足度が低い値であった。また、学校生活意欲の「クラスはみんなで協力しあっていると思う」という項目のアンケートでは、低学年時から継続し、他の項目と比べて肯定的な回答が少なかった。そして、異性との関係だけでなく、同性の友達関係にも過剰な気遣いや無関心な姿が見られた。

(2) 研究の内容

平成30年度は、10回に渡り、学級目標の他に田中が提唱する「学級力アンケートとレーダーチャート」と新潟大学附属新潟小学校で実践されている「附属新潟式学級力」を参考にしながら、本学級で継続して行われていたクラス会議の要素を取り入れ実践した。「学級力向上プロジェクト」とは、学級力アンケートによる学級力の自己評価とレーダーチャートの結果を基にした話し合い活動、話し合いで挙げた解決策を主体的に取り組む活動の3つを1年間のR-PDCAサイクルに沿って計画的に実践する問題解決学習である。「クラス会議」は、子どもたちが生活上の問題を議題として出し、クラス全員で解決策を出す活動である。山崎・栗原（2010）は、「クラス会議は、ポジティブ感情に支えられた肯定的なコミュニケーションの積み重ねを通じて、子どもたちを自己中心的な思考から問題解決的な思考に向かわせることが示唆された。」としている。レーダーチャートに表すアンケート内容は、8項目とし（表1）、アンケート結果からクラス会議の議題を設定したり、学校生活の振り返りに活用したりした。平成31年度からは、学級力アンケートを学級目標と分けず、学級目標の内容自体をレーダーチャートの項目とし、学級力アンケートと学級目標とを統一化した。そのように変更した理由は、平成30年度において学級目標から剥離された学級力アンケートになってしまい、児童の願いや学級への課題意識に寄り添った活動にすることができなかつたと筆者が感じたからである。そのため学級目標の8項目を学級経営の中核に据えることで、各種教育活動との関連を図り、学級目標を日常的に意識することをねらった。

平成31年度は、児童、保護者、教師の三者の学級への願いを取り入れて学級目標を設定した。そのために、4月、学級だよりで保護者に学級目標作りへの協力を呼びかけた。すると以下のような保護者の願いが寄せられた。

- 「自尊心を高め、他者を尊重する力を身に付けて欲しいです。」
- 「自分で自分の生活を管理して、早寝早起きなど基本的な生活習慣を確立してほしいです。」
- 「人に対して素直に感謝の言葉を言えたり、他の人の気持ちを考えられたいようになってほしいです。良いところは、そのまま伸ばして欲しいです。6年生はリーダーシップを必要とされる機会が増えるので、自分の考えや気持ちを上手に伝えられるようになって欲しいです。」（一部抜粋）

上述した保護者アンケートの下線部は、実際に学級目標の項目に反映されている内容である。保護者の思いの全てを学級目標に盛り込むことはできなかったが、保護者アンケートの結果を児童とも共有し、それを踏まえて自分たちが1年後にどんな姿になっていたいかをクラス会議で考えさせて項目を8つにまとめる話し合いをした。

表1は、平成30年度と平成31年度の学級目標の項目の変化である。「異性のよさを尊重する」や「相手と自分のよさを認めている」という項目は、学級の実態から担任が提案したところ、多くの児童から共感を得て決定した内容である。学校生活にかかわる内容だけでなく、「10時までに寝る」や「週に一度、体を思いきり動かす」という項目は、学校外の生活も大きくかわるが、保護者にアンケートをとっているからこそ、学級だよりや学級懇談会で協力を積極的に呼びかけることができた。

表1 〔平成30年度学級力アンケート8項目（左）
平成31年度学級目標として提示した8項目（右）〕

目標を立てる	学習を楽しむ
努力する	異性のよさを尊重する
話をつなげる	相手と自分のよさを認めている
新たな考えをつくる	あいさつ・返事・靴並べ
相手を受け入れる	他の学年に優しく接する
助け合い、教え合う	週に一度、体を思いきり動かす
生活のきまりを守る	10時までに寝る
学習の約束を守る	新しいアイデアを楽しむ

学級目標クラスアンケート					
	名前	1	2	3	4 (100%)
A: 学習を楽しんでいるか (まだまだ)		1	2	3	4 (100%)
B: 異性のよさを認め、尊重する		1	2	3	4-
C: 相手の自分のよさを認めている		1	2	3	4-
D: あいさつ・返事・靴並べ		1	2	3	4-
E: 他の学年に優しく接する		1	2	3	4-
F: 週に一度、体を思いきり動かす		1	2	3	4-
G: 10時までに寝る		1	2	3	4-
H: 新しいアイデアを楽しむ		1	2	3	4-

図1 実際のアンケート用紙

学級目標を設定した後、毎月のはじめに8項目を4段階で評価（図1）し、レーダーチャートにした。拡大したものを黒板に貼り、その月の個人の目標を設定した。数値の低い項目では、学級活動や朝活動の時間を活用し、クラス会議を行い、問題解決のために努力する集団の行動目標を立てた。また、道徳科の授業の導入においては、「異性のよさを尊重する」項目を提示し、課題意識をもたせるなど、授業においても活用した。平成31年度からは、学校行事である「1年生を迎える会」「運動会」「修学旅行」の目標決めとその振り返りに学級目標を関連させた。

話し合い活動では、特別活動指導資料の学習過程を参考に「実践なき振り返り」や「話し合いなき振り返り」とならないようPDCAサイクルを取り入れた。解決方法を決定する段階では、赤坂（2014）を参考にクラス会議を繰り返し行った（写真1）。表2は、「出し合う」「比べる」「まとめる」という流れを意識したクラス会議の流れである。写真2は、そのクラス会議における板書内容である。クラス会議では、8項目の中からクラスで数値を向上させたい項目を選び、クラス全体で取り組む具体的な解決策を話し合った。学級で決めた内容は、レーダーチャートを拡大した紙に書き込み、1ヶ月間、朝の会や帰りの会に解決策を振り返りながら実践を行った。月によっては、友達が生活の中で話し合った行動を実践できたときに、それを帰りの会で発表し合い、達成度を可視化するため、ビー玉を集めるといった活動などを行った。振り返りでは、評価項目にかかわる友達や自分のよかった姿を具体的に書き込み、互いの姿を認め合う時間を設けた。

(3) 分析の方法

大きく分けて、以下の3つの方法で分析を行う。

1つ目は、学級目標のレーダーチャートの数値の変容である。学級目標との関連を重点的に図った平成31年度実践の結果を分析する。8項目ある中で、学級の課題として筆者が特に重視していた「異性のよさを尊重する」と「相手と自分のよさを認めている」の2項目に注目することとする。

2つ目は、Q-Uアンケートの結果である。学級が協力し合っているという児童の意識の変容について、第1学年からの変容を考察する。Q-Uアンケートは、児童の心理状態の把握という点において一般化された尺度であるため人間関係の変容と学級に対する意識の変容を検証するために妥当性のある方法であると考えた。

3つ目は、抽出児の意識の変容である。2名の女子児童を抽出し、A児とB児とした。2名とも第5学年の当初は、学級への愛着や所属感が著しく低く、学級の問題についても無関心な様子であった。分析においては、前述の個人アンケートの結果に加え、第6学年の第1学期末に行った「学級目標と自分自身の成長」を題材とした作文の内容にふれる。

以上、3つの分析を組み合わせることで、本研究の目的に対し量的変容と質的変容を分析し、より結果の裏付けとなると考えた。

4 実践の結果と分析・考察

(1) 学級目標の毎月の評価からみる児童の変容

図2は、平成31年度の4月から7月までの学級目標レーダーチャートの結果である（最大値100）。毎月、学級平均の数値を上げることができた。特に6月は、数値の大きな上昇が見られた。6月は、修学旅行があり、クラスの全体目標に以下の2項目が挙がった。学級全体で取り組むこととして、「班別行動で



写真1 クラス会議



写真2 クラス会議における板書内容

表2 「出し合う」「比べる」「まとめる」クラス会議の流れ

経過時間	学習活動
0分	1. 輪になる。
3分	2. 「ハッピー発表」行う。
7分	3. 話し合いのきまりを確認する。
8分	4. 議題についての話し合い ①議題を確認する。
	②解決のアイデアを出し合う。
20分	③アイデアを比べ合い、その理由やメリットなどについて話し合う。
25分	④比べた意見を全体で合意形成し、まとめる。
35分	⑤個人の目標について考え、発表する。
45分	5. 話し合いへの参加姿勢の振り返り

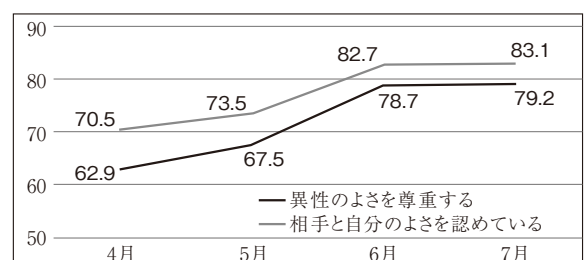


図2 レーダーチャート（平成31年度4月～7月）

困ったときは、男女全員で話し合いをして行動する」「就寝前にクラスみんなで集まり出し物大会をする」という2つの取組を行い、児童が意識的に活動したことが起因しているのではないかと推察される。

(2) Q-Uアンケートにおける集団の関係性の変容

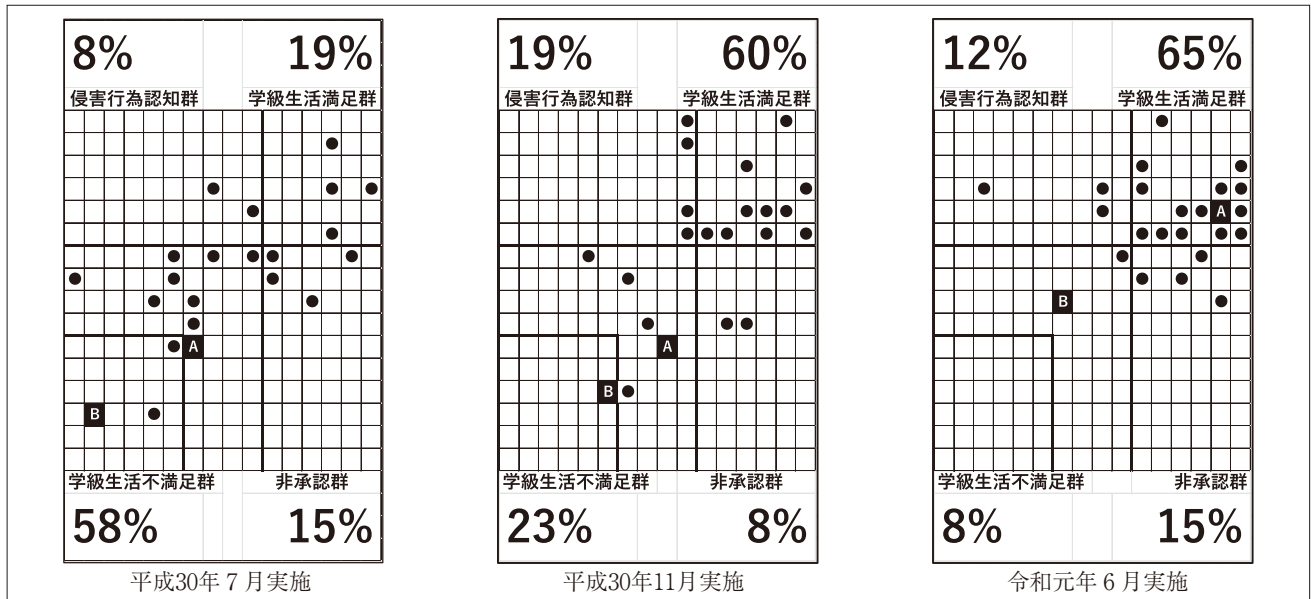


図3 Q-Uアンケート学級満足度尺度の推移

① 学級満足度尺度の推移から

Q-Uアンケートの学級生活満足群に注目すると平成30年7月の19%から令和元年6月の65%に増加した。学級不満足群に着目すると58%から8%に減少し、また要支援群の児童がいなくなった。全体的な児童分布が右上の学級満足群へ移動していることから、学級内によりよい人間関係が構築されつつある状態であると分かる。

② 学校生活意欲尺度における学級の雰囲気領域の質問項目から

Q-Uアンケートで「学級の雰囲気」の指標となる「クラスはみんなで協力しあっていると思う」という項目では、大きな変容が見られた。前述のとおり、担任が学級の問題として捉えていた項目である。4段階の評価（「4.とてもそう思う」、「3.少しそう思う」、「2.あまりそう思わない」、「1.まったくそう思わない」）を第1学年時からグラフ化すると図4のような結果となった。この項目は、低学年の時から特に低い数値で推移しており、クラスの課題として考えられていた。しかし、「協力し合うクラス」という実感をもつ児童の数が本取組を始めた第5学年時11月の結果から肯定的な回答へと変容していることが分かる。本学級においてレーダーチャートを活用し始めた第5学年以降に大きな変容があったことが分かる。これには、学級目標を関連させたクラス会議の継続が学級の協力し合う意識を生んだと考えられる。平成30年7月の結果の「2.あまりそう思わない」と回答した一人児童は、抽出児Aである。その後2回のアンケートでは、「3.少しそう思う」を選択しており、肯定的な回答に変化したことが分かった。

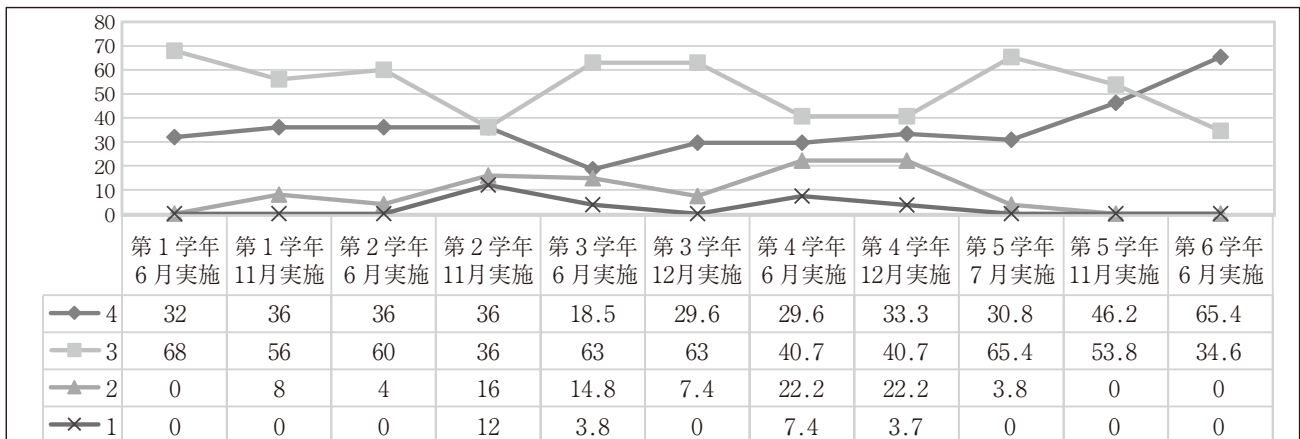


図4 Q-Uアンケート「クラスはみんなで協力しあっていると思う」結果（単位：％）

（※小数第2位で四捨五入しているため、合計が100%になっていない場合がある。）

(3) 抽出児の意識の変容

① 学級目標レーダーチャートから

表3は、抽出児童であるA児とB児の学級目標レーダーチャートにおけるアンケートの回答結果である。表3から、学級目標の評価が少しずつ肯定的な評価に変わっていることが分かる。5月から6月にかけては、運動会や修学旅行が続き、学級で協力しあう場面が多い。その中でB児は、「男子のよさを生かして活動する。」と個人目標を設定し、振り返りにおいては、男子児童のよさを認める記述が見られた。

② Q-Uアンケートから

前述の図3に「A」、「B」で示したとおりA児は、学級不満足群から満足群に移動した。第5学年時の第1学期（平成30年7月）段階では、男子との物の取り合いなどのトラブルが、月に2回程度の頻度であったが、そのような姿は全く見られなくなった。第6学年時7月の個人目標では、「男子と仲良くするため、毎週お楽しみ会をして遊ぶようにする。」と設定し、実際にドッジボールやバスケットボールをして遊ぶ様子が見られた。これにはA児一人の努力だけではなく、学級全体で男女の仲について考え続けたことが、A児を囲む周りの児童の意識の変容へつながったと推察できる。B児は、要支援群から少しずつ右上に移動し、平成31年度の7月には要支援群から抜け出した。B児は、大変自己肯定感が低い児童であったが、学級目標の振り返りで他学年と楽しそうに遊ぶ様子や元気にあいさつをする姿を多くの友達から認められる場面（写真3）があり、少しずつ自信をもって生活している姿が見られる。

表3 A児とB児のアンケート結果

	A児		B児	
	異性のよさを尊重する	相手と自分のよさを認めている	異性のよさを尊重する	相手と自分のよさを認めている
4月	2	2	2	1
5月	2	2	2	1
6月	3	3	4	2
7月	3	3	3	3

（「4.よくできている」、「3.まあまあできている」、
「2.あまりできていない」、「1.まったくできていない」）

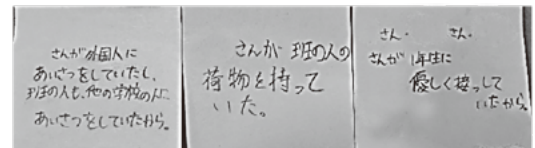


写真3 B児に対する振り返りの付箋

③ 児童の作文から

以下は、A児とB児の令和元年度の第1学期末に行った学級目標を振り返った際の作文である。

- A児「1学期、学級目標を振り返って、クラス全体でよくできていたところは、新しいアイデアを楽しむことと学習を楽しむこととあいさつ・返事・靴並べの3つです。理由は、運動会などで新しく聖火リレーや巨大てるてる坊主を2つにして、たくさん新しいアイデアを楽しめました。修学旅行では、Cさん（男子児童）がバスの時間を班のみんなに教えてくれたり荷物を持ってくれたりしました。男子のよいところを見つけることができました。（中略）クラス全体でできていないところは、授業の終わりのあいさつです。「がんばりました。」と最後まで言っていないのに動き出してしまう人がいるからです。解決するためにみんなでクラス会議をすればよいと思います。」
- B児「クラス全体でよくできたことは、あいさつだ。7月からクラスに「あいさつをがんばる」という目標がある。そのおかげで前よりあいさつをする人が増えたり、元気よくあいさつしたりする人がでてきた。（校長室にあいさつ。教務室にあいさつ。学校に来たお客様にあいさつをしている人がたくさん。）最高学年になった今、みんな他の学年と遊ぶ機会が多くなった気がする。1年生と楽しく遊んだり、4、5年生とドッジボールやハンドベースをしたり、まだ学校生活に慣れない1年生をフォローしたり、質問されたときには優しく教えている。また、男子との仲もよくなったと思う。修学旅行では、夜の出し物大会でクラスみんな楽しめたり、班行動でもすすんであいさつする男子が多かった。」
- ※下線は、「異性のよさを尊重する」項目に結びつけられる部分である。

下線部以外の記述にも至るところに学級目標の項目を関連づけて振り返る記述が見られる。また、A児は、網掛け部分にあるように、学級目標の項目以外からも学級の課題を見つける記述もあった。

5 全体のまとめ

学級目標をよりどころにし、学級の現状を振り返ることで児童が同じ目標を共有することができた。また、クラス会議では、学級目標の項目から議題を決定し、話し合いを進めることができた。学級目標においては、漠然としたイメージではなく、学級目標の具体化とレーダーチャート化をすることで、より児童と教師、保護者の学級への願いが共通理解

された。学級会やクラス会議においては、その時その時での、クラスの問題が議題に提案されることが一番の理想であるが、ただ議題ボックスなどを置いて待っているだけでは、問題が提起されないことが多い。学級の実態に応じ、支援者である教師から児童が自分たちの学級を振り返るための視点を与えることや学級目標の達成度を可視化することが、話し合いと活動のサイクルを生み、クラス会議を充実させる有効な手立てであることが明らかになった。

学級目標のレーダーチャート化とクラス会議は、粘り強くクラスに向き合い、とことん話し合いをし、学級の仲間と向き合う時間作りとなった。第5学年の初めは、クラス会議をしても友達の話に無関心な児童が複数いた。学級の目指す姿を児童に問いかけ、小さな問題の解決とわずかなレーダーチャートの向上を何度か繰り返す中で児童のクラス会議に向かう姿が変わってきた。上半身を乗り出し、友達の悩みについて考え、自分の思いを伝えるようになってきた。第6学年の初めに、学級目標の項目をみんなで作ることを提案すると児童は生き生きと学級の課題について話し合った。そんな学級の熱量が高まるにつれ、上述したA児やB児などのクラスへの話し合いに無関心だった児童が少しずつ自分の目標について自信をもって語るようになった。振り返りの付箋では、多くの児童が学級と個人の生活ぶりを学級目標の項目をよりどころにして友達のよかった姿を書き込んでいた。本実践をとおして、「他者と協働しながら、多様な個性を認めて人間関係をよりよく築いていきたいと願う学級」への成長がみられた。

本学級では、クラス会議の他に、学級における会社活動（お楽しみ会作り）においても「学級目標を実現するための活動」を前提に企画を考えている。目標を共有した集団が自治的な問題解決集団へと成長し、自分たちの学級に愛着をもち、誇りに思える集団をこれからも目指したい。

6 今後の課題

学級の様子を数値化したり、それに対する全体目標を決定したりする実践では、時として教師や児童の学級への「所属感」や「連帯感」を大切にすあまり、過度の同調圧力を生んでしまう危険性も考えられる。具体的な例としては、事実と異なる場合でもアンケートの項目を肯定的に評価してしまうことや児童同士による否定的なアンケート結果をめぐる強い責め合いである。本学級では、児童の間でそのような言動は見られなかったが、教師は集団の目標を大切にしつつも個人の目標設定と取組を認めていくことが求められる。本取組を進めていく中で、「数値を100にすることが一番大切なこと」ではなく、「学級での困り感の共有」として、レーダーチャートを活用していることを児童に繰り返し説明するよう心がけた。また、学級目標の数値化と学級内の同調圧力の有無については、これからも意識的に指導を続け、同調圧力を生まない学級づくり、話し合い活動を実践、研究していきたい。

レーダーチャートの項目は、8項目から増減させることが可能であり、発達の段階や学級の実態に応じては、少ない項目で実践することも考えられる。また、学級目標は学校目標の内容が基本の土台になるべきであり、学校・学年の実態に応じた項目作りを行い、全校で取り組むことでより効果的な実践になり得る。本研究では、筆者が担任する1学級の実践であったが、今後は、小学校6年間の特別活動で身に付けさせたい資質・能力を整理し、全校での取組を実践していく。

引用・参考文献

- 赤坂真二『最高の学級づくりパーフェクトガイド』明治図書、2018年
 赤坂真二『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル 人とつながって生きる子どもを育てる』明治図書、2014年
 杉田 洋『新学習指導要領の展開 特別活動編』明治図書、2017年
 杉田 洋『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化、2009年
 田中博之『学級力向上プロジェクト「こんなクラスにしたい！」を子どもが実現する方法』金子書房、2013年
 日本特別活動学会『キーワードで拓く 新しい特別活動』東洋館出版社、2019年
 文部科学省／国立教育政策研究所 教育課程研究センター『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂、2019年
 山崎 茜、栗原慎二『クラス会議が問題解決能力に及ぼす効果』広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター、学校教育実践学研究、第16巻pp37-44、2010年